

# 目的に応じて中心となる語や文を捉える力を育てる国語科学習指導の工夫 — 一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動を通して —

庄原市立庄原小学校 小谷 綾子

## 研究の要約

本研究は、目的に応じて中心となる語や文を捉える力を育てる国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、本研究における目的に応じて中心となる語や文を捉える力を、児童自身によって意識化された目的に応じて、語や文を絞り込み明確にして捉える力とした。この力を育てるために、第4学年において、一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動を行った。この学習活動は、自分の読みの目的を設定する段階、目的に応じて必要な情報や読み方を考え、見通しをもつ段階、目的に応じて語や文を捉え、まとめる段階、まとめた文章や自分の読みの過程を比較し、振り返る段階を組み合わせた単元構成で行うものである。その結果、目的に応じて中心となる語や文を捉える力が高まった。このことから、一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動を行うことは、目的に応じて中心となる語や文を捉える力を育てるために有効であると分かった。

キーワード：目的 中心となる語や文 見通し 振り返り

## I 研究題目設定の理由

小学校学習指導要領（平成20年、以下「指導要領」とする。）国語の第3学年及び第4学年「C読むこと」の説明的な文章の解釈に関する指導事項に「イ目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。」<sup>1)</sup>とある。

平成26年度「基礎・基本」定着状況調査（以下「基礎・基本」とする。）の小学校国語タイプI三2「中心となる語や文の把握」の県平均通過率は25.2%であった。また、「基礎・基本」中学校国語タイプI四3「目的に応じた要旨の把握」の県平均通過率は41.3%と低い。二つの設問の誤答分析によると、両設問とも必要な情報の一部しか取り出せていないものが多く、目的に応じて必要な情報を取り出す力に課題がある。目的に応じて中心となる語や文を捉えることができないという小学校段階の課題が、中学校段階でも克服できていないことを表している。これまでの自身の授業を振り返ると、中心となる語や文を捉える際に、目的によって中心となる語や文が変わるという意識をもたせる指導を十分に行っていなかった。

そこで、本研究では、第4学年の説明的な文章を読むことの学習指導において、一つの文章を複数の目的に応じて読む学習活動を行う。その過程で、目的に応じた必要な情報が何であるかを考える活動、

目的に応じて教材文を読んで内容を文章にまとめる活動、まとめた文章を比較する活動を取り入れる。

このような学習指導の工夫によって、目的に応じて中心となる言葉や文が変わること、目的に応じて読み方が変わることに気付かせるとともに、目的に応じて中心となる語や文を捉える力を身に付けさせることができると考え、本研究題目を設定した。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 目的に応じて中心となる語や文を捉える力について

#### (1) 目的について

小学校学習指導要領解説国語編（平成20年、以下「解説」とする。）では、文章の解釈に関して「文章の内容や構造を理解したり、その文章の特徴を把握したり、書き手の意図を推論したりしながら、読み手は自分の目的や意図に応じて考えをまとめたり深めたりしていくことである。」<sup>2)</sup>と示されている。また、目的について「『目的に応じ』ることは、話すこと・聞くこと、書くことと同様に、読むことにおいても重要である。読むことによって何を得ようとするのか、またどのように活用しようとするのかなどについて考える必要がある。」<sup>3)</sup>と示されている。伊崎一夫（2010）は、文章を読むことについて、「受動的な読みから、目的に応じた能動的な読

み、つまり自分の読み方や感じ方、考え方を重視する『読むこと』の学習が行われなければならない。このことは、『読むこと』そのことが目的にされがちだった従来の国語教室に対して、『読むこと』を何事かをなすための手段として行うことを求めている。」<sup>4)</sup>と述べている。実生活で文章を読むときには、読者は何らかの目的をもって読む。伊崎の指摘する読むことを目的とする学習から読むことを手段とする学習への転換は、国語科における読みを実生活の読みに近付けることをねらったものである。これは、実生活で生きてはたらく国語の能力を育てることにつながる。このことから、授業において目的を設定して読ませることが重要といえる。また、このことは「指導要領」の説明的な文章の解釈に関する指導事項とつながっている。水戸部修治（2010）は、「読む目的は単に形式的に設定されればよいのではなく、児童自身にとっての目的意識に支えられて文章を解釈することが大切なものとなる。」<sup>5)</sup>と述べている。これは、文章を読むときに読む目的を設定することだけでなく、文章を読む過程で、児童自身に常に読む目的を意識させながら文章を読ませることが重要だという指摘である。

以上のことから、本研究では「目的」を、「読むことによって必要な情報などを得たり、読んだことを活用したりしようとするなど、児童自身によって意識化される目的」とする。

## （2）中心となる語や文について

伊崎（2010）は読むことにおける中心となる語や文について、「『中心となる語や文』は文章中にはじめから顕在化しているわけではなく、読む目的に応じて読み手が文章に働きかけたときに焦点化され、顕在化していくものである。」<sup>6)</sup>と述べている。高木まさき（2013）は、「読みの『目的や必要に応じて』、『中心となる語や文』『文章の要点や細かい点』などは異なる場合があるということです。」<sup>7)</sup>と述べている。水戸部（2013）は、「説明的な文章を読む場合においても、中心となる語や文は、もとより客観的に存在しているのではなく、読者の読む目的に応じて鮮明に浮かび上がってくるものである。それ故、学習指導要領においては『目的に応じて』読むことを規定しているのである。」<sup>8)</sup>と述べている。これらは、児童が読む目的を意識化して文章を読むときに、中心となる語や文が絞り込まれ明確になり、そのため個々の児童の読む目的に応じて「中心となる語や文」は異なってくることを示している。

以上のことから、本研究では「中心となる語や文」を、「読む目的に応じて、児童が絞り込み明確にする語や文」とする。

## （3）目的に応じて中心となる語や文を捉える力について

中心となる語や文を捉えることについて、「解説」には「文章を読む目的に応じて中心となる語や文をとらえるような学習を工夫することが重要である。読む目的によって本や文章の活用の仕方が変わり、そのため取り上げる中心となる語や文も変化していく。」<sup>9)</sup>とある。これは、同じ文章であっても読む目的によって中心となる語や文が変わることを示している。

以上、（1）（2）（3）を踏まえ、本研究では、「目的に応じて中心となる語や文を捉える力」を「児童自身によって意識化された目的に応じて、語や文を絞り込み明確にして捉える力」とし、同じ文章であっても読む目的によって捉える中心となる語や文は変わってくると整理する。

## 2 一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動について

### （1）目的に応じて説明的文章を読む学習活動について

国語科の学習指導における読みについて、大槻和夫（平成5年）、長崎伸仁（2008）、植山俊宏（1995、2002）の先行研究をまとめ、表1に示す。

表1 国語科の学習指導における読み

	従来の読み	求める読み
大槻 <sup>(1)</sup>	○精読中心	○学習者が主体的な問題意識をもった読み（情報化社会への対応として） ○情報の検索・選択・吟味・整理・活用をする読み
長崎 <sup>(2)</sup>	○教材文理解を目的とした読み	○表現することを目的とした読み ○学習者を認識主体とした読み
植山 <sup>(3)(4)</sup>	○筆者中心、文章中心、授業者中心 ○要点把握・要約・要旨把握の読み	○学習者中心 ○読者主体の読み

大槻は、社会の変化に対応できる国語学力は、学習者が主体的・能動的に学習活動に取り組んでこそ伸びていくとし、学習者の意欲を喚起すること、能動的な学習活動を組織することの重要性を指摘している<sup>(1)</sup>。国語科の学習指導について「学習者に生きてはたらくことばの力を育てようとすれば、生きて

はたくことばの力を行使せざるをえない『場』に学習者を立たせなければならない。しかも、その『場』が学習者の目的的な行動の結果として立ち現われてきたように仕向けていかなければならない。」<sup>10)</sup>と述べている。これは、国語科において児童に主体的な目的意識をもたせることの重要性を示している。長崎は、理解のみを学習の目的とする説明的文章の学習は学力の低下を招くとし、読んだ内容を使って表現することを核とした授業を提起している<sup>(2)</sup>。その中で、「あくまでも読み取ることだけを目的としないで、学習者を認識主体として筆者に絡ませるのである。」<sup>11)</sup>と述べ、表現することを目的とした主体的な読みをさせることの必要性を指摘している。植山は、筆者中心・文章中心の読みが説明的文章の学習を硬直化・形骸化させていることの問題点を挙げ、学習者が認識変革を実感できることが説明的文章の読みの意義であるとし、学習者中心の読みの重要性を指摘している<sup>(3)</sup>。その上で、説明的文章の読みの過程・構造・能力に関わって「筆者の意図に遡上していく読みのあり方から読者が主体的に意味を獲得する読みへと転換が図られたのである。」<sup>12)</sup>と述べている。

3氏は、それぞれ表現は異なるが、実生活に生きてはたく読む力の育成の立場から、説明的文章の学習における読みを、文章中心の読みから児童の目的意識を重視した学習者中心の読みへと転換する必要性を指摘している。このような転換のためには、実生活につながる目的が自然に意識されるような実生活につながる場面設定が必要である。

のことから、目的に応じて説明的文章を読む学習活動において、読む目的を実生活につながるような目的とすることと、読む活動を実生活につながる場面設定で行わせることが重要であるといえる。また、長崎、大槻の求める読みから、表現することを目的とし、文章を目的に応じて選択・吟味・整理しながら読み、活用することも重要であると考える。

## (2) 一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動について

一つの文章を一つの目的で読んだ場合、目的に応じて中心となる語や文を捉えることはできても、目的に応じて中心となる語や文が変わること、その語や文を捉えるために読み方を変える必要があることに気付くのは難しい。目的を複数設定することで、前述のことに気付かせることができる。そこで、本研究では、一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動を設定する。

水戸部(2013)は、文章を読む場面について、「そこには読む目的や読んでみたいという課題意識があり、それに応じてどこを精読するかが確定される。」<sup>13)</sup>と述べている。私たちは実生活において、何かを得ようと目的意識をもち、目的に応じてどのような情報が必要でどのように読んでいくか考えて文章を読んでいる。国語科の授業においても、実生活と同様に、読み始める前に目的に応じて必要な情報と読み方を考えさせ見通しをもたせることが必要である。複数の目的を設定し、それぞれの目的に応じて複数の見通しをもたせることで、文章を目的に応じて読み分ける意識、主体的に文章を読もうとする意欲を高めさせることができる。

堀江祐爾(2007)は、「自分の学びを『メタ認知』できているということは、学びを一般化できているということであり、他の場においても応用可能な『生きた力』を身につけることができているということである。」<sup>14)</sup>と述べている。読解力向上に関する指導資料(平成19年)には、「一つの単元(教材)が終了しても、単に活動をしただけで、どのような能力を習得したのかを学習者が明確に自覚できないようでは、課題に即応した読みを行っていくことはできない。」<sup>15)</sup>とある。これらのことから、授業で学んだ読み方を他の文章を読むときにも使えるようにするために、自分がどう読んだかを振り返り、メタ認知することが重要であるといえる。本研究では、一つの文章を複数の目的に応じて読み分けてまとめた文章やまとめに至る自分の読みの過程を比較させながら振り返らせる。この振り返りにより、目的に応じて、自分がどのような読み方で、どのような語や文を捉えたのかをより明確に認識でき、目的に応じて中心となる語や文を捉える力が他の場においても応用可能な力として定着するものと考える。

のことから、本研究では、見通しと振り返りの活動を重視して、一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動を設定する。

## (3) 一つの文章を複数の目的を設定して読む学習の展開

本研究では、一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動を、「自分の読みの目的を設定する段階」「目的に応じて必要な情報や読み方を考え、見通しをもつ段階」「目的に応じて語や文を捉え、まとめの段階」「まとめた文章や自分の読みの過程を比較し、振り返る段階」の四つを組み合わせて設定する。この学習活動を取り入れた単元を構想し、図1に示す。

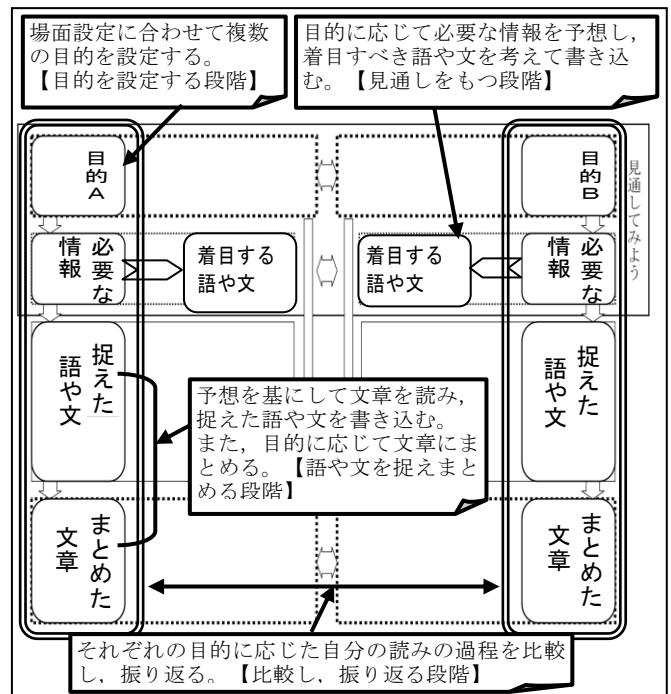


図2 ワークシート（モデル）

複数の目的について、それぞれの達成のためにはどのような情報が必要になるか、自分なりに予想させる。その予想に基づき、どのような語や文に着目して読めばよいか、目的に応じた読み方を児童自身に考えさせる。

このようにして、それぞれの目的に応じた必要な情報と読み方の見通しをもたせる。その上で、見通しを比較させることで、目的によって必要な情報や中心となる語や文が変わってくること、それに伴い読み方を変える必要があることに気付かせる。

#### ア 自分の読みの目的を設定する段階

児童自身が読む目的や読んでみたいという課題意識をもつことのできるような実生活につながる場面設定で、複数の目的をもって読まなければ行うことのできないという仕掛けを施した単元を貫く言語活動を設定する。場面設定と単元を貫く言語活動に施した仕掛けによって、児童自身は必然性を感じながら、主体的に複数の目的を設定する。また、単元を貫く言語活動の具体的な姿を提示し、目的に応じて読んだゴールのイメージを具体的にもたせ、そのゴールに到達しようとする意欲を高めさせる。

イ 目的に応じて必要な情報や読み方を考え、見通しをもつ段階

目的に応じて、どのような情報が必要になるか、どのような語や文に着目したらよいか、必要な情報と読み方の見通しをもたせるために、ワークシート（図2）を活用する。なお、このワークシートは、この後の活動において、目的と捉えた語や文の関係、まとめた文章の関係が視覚的に把握でき、目的に応じて捉えた語や文が対比的に認識できるものである。

ウ 目的に応じて中心となる語や文を捉え、まとめる段階

必要な情報と読み方の見通しを基に、読むことによって何を得るのか、どのように活用するのか、明確に目的意識をもたせて教材文を読ませる。教材文へ目的ごとに色分けをして書き込む工夫や、図2のワークシートの活用により、目的と捉えた語や文の関係が視覚的に把握でき、目的に応じて捉えた語や文が対比的に認識できるようにする。

その後、捉えた語や文を基に、それぞれの目的に応じて文章にまとめさせる。まとめた文章については、目的との対応を確認させ、目的が達成できたかを自己評価させる。また、必要な情報の予想や捉えた語や文を見直させ、予想を修正させたり、語や文を捉え直させたりする。

## 工 まとめた文章や自分の読みの過程を比較し、振り返る段階

複数の目的に応じてまとめた文章を、捉えた語や文に着目して比較させる。まとめた文章と教材文を対応させながら比較させることで、同じ文章でも目的に応じて中心となる語や文が変わってくることを認識させる。また、中心となる語や文をどのような過程で捉え、文章にまとめたか、図2のワークシートを用いて読み方を比較させ振り返らせることで、目的に応じて中心となる語や文を捉える読み方をメタ認知させ、他の場面でも使える力をとして定着させる。

本研究では、このような学習の展開によって、目的に応じて中心となる語や文を捉える力を育てる。

### III 研究の仮説及び検証の視点と方法

#### 1 研究の仮説

一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動を行わせることで、目的に応じて中心となる語や文を捉える力を育てることができるであろう。

#### 2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表2に示す。

表2 検証の視点と方法

検証の視点	方法
目的に応じて中心となる語や文を捉えることができたか。	○事前・事後テスト ○事前・中間・事後アンケート ○リーフレット ○ワークシート ○ノート
複数の目的を設定して読む学習活動は、目的に応じて中心となる語や文を捉えるのに有効であったか。	

### IV 研究授業について

#### 1 研究授業の概要

- 期間 平成27年6月25日～平成27年7月10日
- 対象 所属校第4学年（1学級30人）
- 単元名 スポーツ選手のメッセージを伝えよう
- 教材文 「動いて、考えて、また動く」高野進（国語四上かがやき 光村図書 平成27年）
- 目標 目的に応じて中心となる語や文を捉えて文章を読むことができる。
- 単元を貫く言語活動 自分の選んだスポーツ選手のメッセージをリーフレットにして伝える言語活動。

#### 2 指導計画（全9時間）

次	時	主な学習活動	自己をリーフレットに選んだスポーツ選手のメッセージ
一	1	「スポーツ選手のメッセージリーフレット」を作り3年生に伝えるという学習の見通しをもつ。	自分の選んだスポーツ選手のメッセージ
	2	複数の目的に応じて、必要な情報と読み方を考える。	
二	3・4	筆者の考えを伝えるという目的に応じて、中心となる語や文を捉えて文章にまとめる。	自分の選んだスポーツ選手のメッセージ
	5	走り方を伝えるという目的に応じて、中心となる語や文を捉えて文章にまとめる。	
	6	まとめた文章や捉えた語や文、自分の読みを比較し、振り返る。	
三	7・8	自分が選んだ文章からスポーツ選手のメッセージを読み取り、リーフレットにまとめる。	自分の選んだスポーツ選手のメッセージ
	9	リーフレットを読み合い、交流する。	

### V 研究授業の結果分析と考察

#### 1 目的に応じて中心となる語や文を捉えることができたか

##### （1）事前・事後テストの結果、リーフレットの記述より

事前テストには「かんづめ」についての説明的文章（平成24年度「基礎・基本」）を、事後テストには「フクロウ」についての説明的文章（平成22年度「基礎・基本」）を課題文として用いて、目的に応じて中心となる語や文を捉える力を検証する問題を設定した。これは、課題文の中から中心となる語や文だと捉えた部分にサイドラインを引いた上で、中心となる語や文をまとめた一文の空欄に適切な語を抜き出して答える問題である。目的に応じて中心となる語や文を捉え、まとめることができるかみるもので、文字数や前後の言葉からの推測によらず、内容の理解によって解答できるものに設定している。この結果を図3に示す。

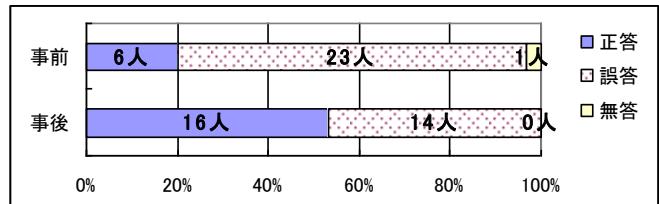


図3 目的に応じて中心となる語や文を捉え、まとめることについての事前・事後テストの結果

事前テストでは正答6人（20%）であったが、事後テストでは正答16人（53%）に増えた。

しかし、事後テストでも依然14人の児童が誤答であった。この問題は、フクロウが樹洞を巣にする三つの理由をまとめた文中にある二つの理由の説明部分に適切な語を空欄補充するものである。語は、課題文の中からそれぞれ抜き出して答える。14人のうち7人が、一つの理由に着目して語を捉えていた。

また、2人が理由の説明である具体例に着目して答えていた。フクロウが樹洞を巣にする理由をまとめるという目的は意識できていることがみとれた。

そこで、目的に応じて中心となる語や文を捉えることができているかみるために、課題文へのサイドラインの書き込みの状況について分析した。判断基準を表3、事前・事後テストの結果を表4に示す。

表3 目的に応じて中心となる語や文を捉えることを検証する判断基準

段階	判断基準
A	目的に応じて中心となる適切な語や文の全てにサイドラインを引いている。
B	目的に応じて中心となる適切な語や文の大体にサイドラインを引いている。
C	目的に応じて中心となる適切な語や文にサイドラインを引いていない。

表4 目的に応じて中心となる語や文を捉えることについての事前・事後テストの結果

事前	事後	A	B	C	計(人)
A		1	1	0	2
B		4	10	0	14
C		6	8	0	14
計(人)		11	19	0	30

事後テストでは、目的に応じて中心となる語や文を捉え、的確にサイドラインを引いている児童が増え、誤答であった14人を含む全員が中心となる語や文を捉えていた。このことから、目的を意識してキーワードを基に中心となる語や文を捉えることはできているが、それら語や文の関係やつながりを明らかにし、内容を理解した上でまとめることには課題があったと考える。

さらに、第三次で、自分の選んだスポーツ選手の書いた文章について目的に応じて中心となる語や文を捉えてまとめたリーフレットの記述を分析した。この判断基準と結果を表5に示す。

表5 リーフレットの記述についての判断基準と結果

段階	判断基準	結果(人)
A	目的に応じて、中心となる語や文すべてを、それぞれのつながりも含めて的確に捉えている。	4
B	目的に応じて、中心となる語や文を、過不足はあるが大体捉えている。	24
C	目的に応じて中心となる語や文を捉えられない。	2

30人中26人（事後テストで誤答であった14人のうち11人を含む）が、自力で中心となる語や文を捉えることができていた。自分の選んだ文章についてリーフレットにして伝えるという目的意識を明確にもった上で、必要な情報と読み方の見通しをもち、目

的に応じた読み方ができたため、中心となる語や文を捉えられたと考える。

これらのことから、授業の中で、読む目的を明確にし、目的に応じた必要な情報と読み方の見通しをもたせた上で、文章を読み取らせ、目的に応じた文章の読み方を整理させたことで、目的に応じて中心となる語や文を捉える力が高まったといえる。

## (2) 事前・中間・事後アンケート結果より

図4及び図5は「説明文を読むとき、読む目的（何のために読んでいるのか）を意識して読むか」「説明文を読むとき、読む目的に合わせて大事な語や文を見付けているか」という質問項目について、児童の意識の変容を示している。

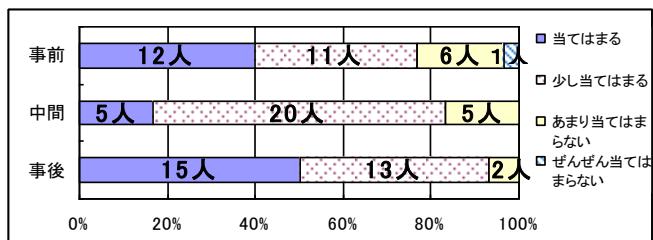


図4 「読む目的を意識して説明的文章を読む」ことに対する児童の意識

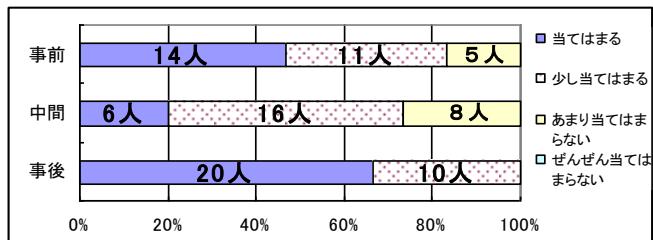


図5 「読む目的に応じて中心となる語や文を捉える」ことに対する児童の意識

目的意識、目的に応じて中心となる語や文を捉えること、いずれも肯定的回答が増えている。

中間アンケートにおいて、目的意識について「当てはまる」と答えた児童が少なくなった理由は、学習を始める前は漠然としていた目的意識の捉えが、学習を通して明確になり、読む目的についてより強く意識をもつようになったためと考える。目的に応じた中心となる語や文の捉えについて中間アンケートで肯定的回答が少なくなった理由も同様であると考える。

学習を通して、読む目的を明確にして読むことができ、さらに、目的に応じて中心となる語や文を捉えることができたと実感できたため、事後アンケートでは読む目的に応じて中心となる語や文を捉えることについての意識が高まったと考える。

## 2 複数の目的を設定して読む学習活動は有效であったか

### (1) 児童の記述による分析

教材文を読む学習では、複数の目的を設定した上で、目的に応じて必要な情報や読み方を考えて見通しをもち、目的に応じて語や文を捉え、まとめる活動を行った。これらの活動の様子を、目的に応じて中心となる語や文を捉える力が向上した児童aのワークシートの記述を例として、図6に示す。

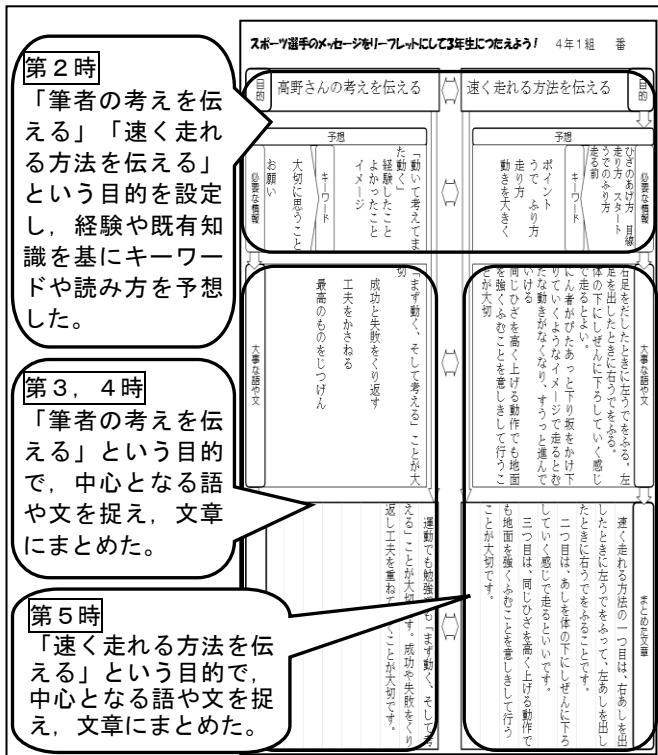


図6 教材文を読む学習活動の様子

ワークシートの記述から、児童aは、既習や生活経験を生かし、目的に応じて必要な情報やキーワードを予想していることが分かる。これを基に、予想した語や文が捉えられなかったときには、他の語や文、他の読み方が必要ではないかと、予想とのズれを修正しながら、目的に応じて中心となる語や文を捉え、まとめることができた。

この活動の後、まとめた文章や自分の読みの過程を比較し、振り返る学習では、目的に応じて中心となる語や文、読み方が変わることに気付くよう「説明文読み方とらのまき」に整理する活動を行った。図7は、児童aの「説明文読み方とらのまき」ワークシートの記述である。これまでの学習を振り返り、それぞれの目的に応じた自分の読みの姿を比較して目的に応じた読み方を整理していることが分かる。

〈筆者の考えを読むとき〉  
 ・「はじめ」「終わり」を読むと分かる。  
 ・イメージする言葉を予想する。  
 ・題名から関係する言葉を見つけて読む。  
 ・「このように」から始まる文に注目する。

〈具体例を読むとき〉  
 ・「中」を読む。  
 ・キーワードを予想する。  
 ・サイドライン  
 ・「このように」から始まる文に注目する。  
 ・図を見ると分かりやすい。

図7 児童aの「説明文読み方とらのまき」ワークシートの記述

また、他の児童のノートの記述をみると「同じ文章でも目的によって大事な語や文や、読み方がちがうことを初めて知りました。」など、目的に応じて中心となる語や文、読み方が変わることに気付いた様子が見られた。

図8は、目的に応じて中心となる語や文を捉えることがB段階からA段階となった児童bが、第三次で用いたワークシートと作成したリーフレットである。ワークシートに書いた捉えた語や文を使ってリーフレットにまとめている。

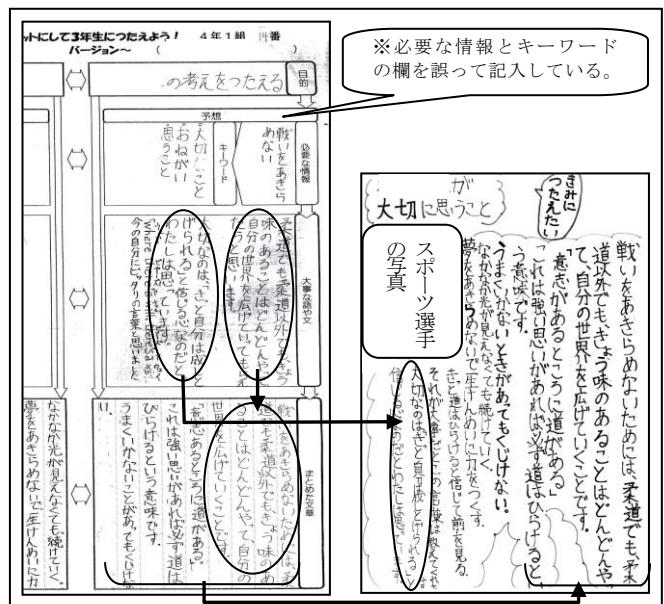


図8 児童bのワークシートとリーフレット

児童bのワークシートをみると、文章の小見出しの「戦いをあきらめない」という言葉が必要な情報を得るためのキーワードだと考えていることが分かる。これは「筆者の考えと題名はつながっている」という、読み方についての学びを生かしているといえる。さらに、予想したキーワードを基に中心となる語や文を捉え、まとめており、目的に応じた読み方をし、中心となる語や文を捉えることができたといえる。単元を振り返って「この勉強を始めたころは、大事な語や文を見つけるのに時間がかかってい

たけど、『とらのまき』やこれまでの学習を思い出して、筆者の考えの大事な語や文は文章の最初か最後にあることが分かったから、今はすぐに見つけられるようになった。」と記述しており、目的に応じて読む力の高まりを実感していることが分かる。

児童aは「キーワードを見つける、具体例は『中』を読む、『はじめ』『終わり』などは筆者の考えを見つけながら読めばいいということが分かりました。」と記述しており、目的に応じた読み方について理解が深まっていることが分かる。

事前テストでは誤答だったが事後テストでは正答となった児童cは「この勉強で内容を読みとる方法が分かりました。自分で大事な語や文を見つけたいです。」と、振り返りに記述していた。他の児童も「これから説明文を読むとき予想したいと思います。」など、記述しており、今回の学びを今後の読みにつなげていこうとする意識も高まっていることがうかがえる。

## (2) 事後アンケートによる分析

説明的文章を読む学習活動が好きかという問い合わせに対して、事後アンケートでは全ての児童が肯定的回答をしている。その理由に「予想しながら読むと書いてあることの意味が分かるから。」「読み方とらのまきを作つて文章を読んだらよく分かったし、リーフレットもすぐ書けたから。」など、学習活動を振り返り、読み方についての学びを実感している記述が見られた。複数の目的を設定して読む学習活動の有用性を感じていることが分かる。

また、事後アンケートで、目的に応じて中心となる語や文を捉えるために、複数の目的を設定して説明的文章を読む学習活動は有効だったかについての意識調査を行った。このアンケートに全ての児童が肯定的回答をしている。この結果から、説明的文章を読んで目的に応じて中心となる語や文を捉えるために、複数の目的を設定して文章を読む学習活動は役に立ったと感じていることが分かる。

以上のことから、一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動は、目的に応じて中心となる語や文を捉える力の育成に有効であったといえる。

# VI 研究のまとめ

## 1 研究の成果

一つの文章を複数の目的を設定して読む学習活動は、目的に応じて中心となる語や文を捉える力を育てることに有効であった。

## 2 今後の課題

- 目的に応じて捉えた中心となる語や文の関係やつながりを明らかにし、まとめるための指導を工夫する必要がある。
- 一つの文章を複数の目的で読む学習活動は、実生活に生きる読みの力を育成するものであり、目的に応じた読み方を他教科などでの調べ学習などにも活用させたい。

## 【注】

- (1) 大槻和夫（平成5年）：「国語の学力と単元学習」『ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開 I 理論編』東洋館出版社 pp. 37-38に詳しい。
- (2) 長崎伸仁（2008）：『表現力を鍛える説明文の授業』明治図書 pp. 14-17に詳しい。
- (3) 植山俊宏（2002）：『説明的文章の領域における実践研究の成果と展望』『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書 p. 284に詳しい。
- (4) 植山俊宏（1995）：『論理的認識力を育てる説明的文章指導方法論』『国語教育を学ぶ人のために』世界思想社 pp. 108-116に詳しい。

## 【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成20年 a）：『小学校学習指導要領』東京書籍 p. 23
- 2) 文部科学省（平成20年 b）：『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社 p. 20
- 3) 文部科学省（平成20年 b）：前掲書 p. 62
- 4) 伊崎一夫（2010）：『『読むこと』の基本的な考え方』『新小学校国語科・重点指導事項の実践開発』明治図書 p. 72
- 5) 水戸部修治（2010）：『『言語活動の充実』を基点とした国語科授業改善』『言語力・活用力を伸ばす—新しい授業づくりをめざして—』文溪堂 p. 39
- 6) 伊崎一夫（2010）：前掲書 p. 73
- 7) 高木まさき（2013）：『国語科における言語活動の授業づくり入門』教育開発研究所 p. 101
- 8) 水戸部修治（2013）：『小学校国語科 授業&評価パフェクトガイド』明治図書 p. 80
- 9) 文部科学省（平成20年 b）：前掲書 p. 63
- 10) 大槻和夫（平成5年）：「国語の学力と単元学習」『ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開 I 理論編』東洋館出版社 pp. 49-50
- 11) 長崎伸仁（2008）：『表現力を鍛える説明文の授業』明治図書 p. 17
- 12) 植山俊宏（2002）：『説明的文章の領域における実践研究の成果と展望』『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書 p. 282
- 13) 水戸部修治（2013）：前掲書 p. 80
- 14) 堀江祐爾（2007）：『国語科授業再生のための5つのポイント—よりよい授業づくりをめざして—』明治図書 p. 47
- 15) 文部科学省（平成19年）：『読解力向上に関する指導資料～PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向～』東洋館出版社 p. 16